令和５年度 文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（女性リーダー育成型）

武庫川女子大学

女子総合大学における挑戦的
次世代女性リーダー育成プログラム

第2回シンポジウム

報告書

・女性研究者の研究力強化とリーダー育成・

武庫川女子大学
女性研究リーダー育成推進センター

C O N T E N T S

開会挨拶

武庫川女子大学学長／女性研究リーダー育成推進センター長
瀬口　和義 …… 2

基調講演

世界初！超簡単な脳波計測による感情のリアルタイム計測装置の開発と
近未来テクノロジー
慶應義塾大学理工学部教授／医学部精神神経科学教室兼担教授
満倉　靖恵 氏 …… 3

令和６年度活動報告

女性研究リーダー育成推進センター副センター長
高橋　享子 …… 4

令和６年度 武庫川女子大学 架橋横断的重点共同研究・グローバル共同研究 報告

難治性乳がん悪性化の機序解明と新治療戦略の創出
薬学部健康生命薬科学科 教授　中瀬　朋夏 …… 6

外国にルーツを持つ児童・生徒の学習意欲に関する社会福祉学的研究
心理・社会福祉学部社会福祉学科 講師　野上　恵美 …… 9

多分野介入による認知症予防教室における音楽活動の有効性
音楽学部応用音楽学科 教授　一ノ瀬　智子 …… 12

閉会挨拶

武庫川女子大学副学長／女性研究リーダー育成推進センター副センター長
高橋　享子 …… 14

会場風景 …… 15

アンケート結果報告 …… 16

令和５年度 文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（女性リーダー育成型）

女子総合大学における挑戦的 次世代女性リーダー育成プログラム 第２回シンポジウム

女性研究者の研究力強化とリーダー育成

日時：令和７年２月21日（金）13：30 ～ 15：30
場所：武庫川女子大学中央キャンパス
日下記念マルチメディア館メディアホール

司会 女性研究リーダー育成推進センター
ワーキングリーダー
田中　真由美

13：30　**開会挨拶**　学長／女性研究リーダー育成推進センター長　**瀬口　和義**

13：35　**基調講演**

座長 女性研究リーダー育成推進センターワーキングサブリーダー　**長谷川　裕紀**

「世界初！超簡単な脳波計測による感情のリアルタイム計測装置の開発と近未来テクノロジー」
慶應義塾大学理工学部教授／医学部精神神経科学教室兼担教授　**満倉　靖恵**氏

14：35　**令和６年度 活動報告**

女性研究リーダー育成推進センター副センター長　**高橋　享子**

14：45　**令和６年度 武庫川女子大学 架橋横断的重点共同研究・グローバル共同研究 報告**

「難治性乳がん悪性化の機序解明と新治療戦略の創出」
薬学部健康生命薬科学科 教授　**中瀬　朋夏**

「外国にルーツを持つ児童・生徒の学習意欲に関する社会福祉学的研究」
心理・社会福祉学部社会福祉学科 講師　**野上　恵美**

「多分野介入による認知症予防教室における音楽活動の有効性」
音楽学部応用音楽学科 教授　**一ノ瀬　智子**

15：25　**閉会挨拶**　副学長／女性研究リーダー育成推進センター副センター長　**高橋　享子**

開会挨拶

武庫川女子大学学長
女性研究リーダー育成推進センター長　瀬口　和義

シンポジウムの開会にあたりまして一言ご挨拶を申し上げます。

ただ今、司会から紹介がありましたように、本学では、「女子総合大学における挑戦的次世代女性リーダー育成プログラム」として、全学的にこのプログラムを推進しているところでございます。その一環として、本日は「女性研究者の研究力強化とリーダー育成」というテーマでシンポジウムを行います。このシンポジウム開催にあたりまして、学内の教職員だけではなくて、学外からも、非常に遠い所からもおいでいただいている方がいらっしゃいます。本当にありがとうございます。心より感謝申し上げ、歓迎申し上げる次第でございます。

この女性リーダー育成プログラムは、令和５年度の文部科学省科学技術人材育成費補助事業の中の「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（女性リーダー育成型）」の公募がございまして、本学として応募しましたところ、運よく採択されました。令和５年度から令和10年度にかけての６年間で、３億円程度の補助がいただけることになっております。

令和５年度の採択校は、国立が4校、公立が１校、私立が１校の計６校でございました。女子大学はもちろん本学だけということで、国としても女子大学から女性リーダーをどんどん出してほしいという期待があるのではないかと思っております。国からの補助金ですので期待以上の成果を出せるように、全学あげて取り組んでいるところでございます。

採択後、ただちに女性研究リーダー育成推進センターを立ち上げ、私（学長）がセンター長となり、本学の女性研究者にいろいろ頑張っていただこうということで、時には辣腕を振るいながら事業を推進しているところでございます。令和５年度から新たな制度を立ち上げ、さまざまな支援を始めたのですが、例えば研究留学ができますよ、共同研究用の資金を出しますよ、博士課程の学生には給付金を出しますよ、というようなことをいろいろしたのですが、初年度は、中々手を挙げる人が思った以上にいなくて苦労しました。令和６年度になりまして会議体ですとか、広報媒体ですとか、学内で募ったりし始めましたところ、口コミでどんどん広がってきまして、女性研究者がたくさん手を挙げていただけるようになりました。これはセンターとしては嬉しい悲鳴というところでございます。その手を挙げた研究者の中から女性リーダーとして何人かが育っていくことを私共大いに期待をしている、祈っているという状況でございます。

前置きが長くなりましたが、本日のシンポジウムでは、慶応義塾大学理工学部教授で、世界的に有名な満倉先生に基調講演をしていただきます。その後、今年度の女性リーダー育成プログラムの成果につきまして副センター長の高橋よりご報告をさせていただき、最後に本学の３名の女性研究者、将来的には女性研究リーダーとして独り立ちしてくれるであろう候補者より共同研究の中間報告をさせていただく、というプログラムでございます。本日の午後の時間が皆様方にとって素晴らしい実りのある時間になることを期待いたしまして、開会のご挨拶とさせていただきます。

基調講演

世界初！超簡単な脳波計測による感情のリアルタイム計測装置の開発と近未来テクノロジー

慶應義塾大学理工学部教授
医学部精神神経科学教室兼担教授　**満倉　靖恵** 氏

基調講演には、慶応義塾大学の満倉靖恵先生をお招きしました。

講演では、ご自身の研究成果をご紹介いただくとともに、研究者としてのキャリア形成や、リーダーシップの重要性についてお話いただきました。

令和６年度活動報告

女性研究リーダー育成推進センター副センター長　**高橋　享子**

それでは「女子総合大学における挑戦的次世代女性リーダー育成プログラム」の令和６年度活動報告をさせていただきます。本事業の目標ですが、女性研究者採用比率60%、女性研究者在職比率50%、そして女性教授（管理職）比率40%という挑戦的、かつ野心的な目標を立てております。令和６年度の成果をお伝えします。まず女性研究者採用比率は目標値を上回りまして65.2%まで上げております。それから女性研究者在職比率も目標値に大変近づけておりまして44.2%まで上げております。さらには女性教授（管理職）比率を目標値の33%に近い30.1%まで上げることができました。これは学長の強いリーダーシップの元で実現いたしました。また、女性研究者の採用実績ですが、23名のうち女性を15名採用していただいております。それから上位職への登用ですが、今年度の４月に、本学初の女性副学長が２名就任しております。さらには昇格も教授昇格６名のうち女性４名、准教授昇格７名のうち女性６名を上げていただきました。そして本学初の女性学長ということで、令和７年度に私（高橋）の学長就任が決まっておりまして、現学長の強いリーダーシップの元で数値目標に近づけております。

本年度の活動報告ですが、女性研究リーダー研修制度は令和６年度は２名の在外研修を採択し、令和７年度にはすでに５名予定しております。そして共同研究支援ですが、令和６年度は架橋横断的重点共同研究は８件、海外とのグローバル共同研究は１件ということで、当初５件の予定のところ、９件支援させていただきました。そして大学院博士課程のフェローシップ、教育支援員制度なども実施しております。

この事業の最大のポイントは、「武庫川女子大学サイエンス・コモンズ」から多くの事業を発展させていくということを目標にしておりましたので、サイエンス・コモンズの拠点を整備し、そのオープニングの内覧会を昨年の５月に開催いたしました。多くの方にご参加いただきまして、和気あいあいと、これからどういう研究を発展させようかということで、長時間にわたってディスカッションいたしました。そのサイエンス・コモンズでは月に１回のペースで定期的にセミナーを開催しています。学内の若い先生にご本人の研究発表などしていただきまして、このように夕方の17時半から19時までという大変遅い時間ではありましたが、多くの方にご参加いただいて活発なディスカッションをしております。また、「MUKOJO研究ポットラック」というイベントを２カ月に１回のペースで開催しております。ポットラックとは「持ち寄る」という意味でして、小さな研究でも持ち寄って、そこから共同研究に繋げることができないかと思っています。学内13学部ありますので、異分野の文系と理系の共同研究にも発展させることができるのではないかと考えております。

さらには大型科研費や科研費の獲得に向けてKAKEN塾、研究倫理塾、あるいはKAKEN塾＋研究相談会などの支援も行っております。研究相談会は今月から来月に向けて開催する予定にしていますが、夏の科研費申請までにいろいろな相談会を開催して、先生方に大型科研費を狙っていただきたいと思っております。

さらには英語スキルアップ研修や、プレコンセプションケアセミナーを開催しました。プレコンセプションケアというのはライフイベントに備えることで、将来的な妊娠や出産等に向けて非常に不安に思っていらっしゃる女性研究者や大学院生に対して、ライフイベントと研究との両立に向けた環境整備につきまして講習会を開いたりしてお

ります。

次に、アメリカ・ゴンザガ大学によるリーダーシップ研修を実施しましたが、ゴンザガ大学はリーダーシップに関しては大変研究が進んでおりまして、リーダーシップ学部というものがあります。リーダーシップ研究所というところもありまして、その研究所の２人の先生にオンラインでリーダーシップに関する講習会を開催していただきました。アメリカ現地時間の金曜日の夕方、日本では土曜日の朝一番にオンラインで講習会を７回にわたって行い、リーダーシップにつきまして学びました。

さらには大学院生交流会、女性研究者交流会を開催いたしております。そして女性研究者、大学院生のキャリアの不安に対するカウンセラーを配置し、キャリア・カウンセリングを約30回近く実施開催しております。このようにしてできるだけ多くの先生方に研究が進めやすい環境を整え、さらには大型科研費、大型資金を獲得していただき、さらにはこの補助金で共同研究を推進していただく、ということを試みております。

従いまして、令和５年度にスタートしまして令和10年度までの６年間実施いたしますが、ちょうど今年度で事業２年目が終わりまして、３年目を迎えようかとしておりますが、次年度は新たに国際学会発表の支援、外部評価委員会の開催、海外研究者を招聘した講演会、中間シンポジウムの開催ということで、今年度行いました取組にさらに新しい取組を加えて「挑戦的次世代女性リーダー育成プログラム」を継続していきたいと思っております。そしてこのプログラムからダイバーシティ研究環境実現イニシアティブのモデルを社会に実装していきたいと考えております。今後ともご支援賜りますようにお願い申し上げます。

令和６年度 武庫川女子大学 架橋横断的重点共同研究・グローバル共同研究 報告

難治性乳がん悪性化の機序解明と新治療戦略の創出

薬学部健康生命薬科学科 教授　**中瀬　朋夏**

どうぞよろしくお願いいたします。本日は共同研究の報告ということで、現在している研究の進捗状況、やっていることを中心にお話したいと思います。私は、薬学部の中瀬といいます。私のライフワークは乳がんの研究です。乳がんはまだまだわからないことがいっぱいあるので、それを明らかにして、そこから治療のヒントになるところをみつけていこうというスタイルで研究をしております。

乳がんは皆さんもご存知だと思いますが、乳房の中にできるがんです。このがんは世界中の女性の中で最も多く診断されています。日本におきましても、患者の人数は年々非常に増えておりまして、死亡者数も年々増えていっているといった状況です。そして深刻なのがAYA世代後期です。20歳から39歳の間というのは、働き盛りで、そしてライフステージが大きく変わってという時期に相当しますが、この時期のがん患者を見ますとその約80％が女性です。そして最も割合が高いのが乳がんであるということがわかっております。なぜ女性がこんなに多いのかというのはわかっておりません。乳がんに関しましては現在非常に良い薬がたくさん開発され治るようにもなってきました。しかし一部の乳がんに関しましては転移や再発、そして最初は薬が効いていたけれども効かなくなってしまう、そういったことが予期せず起きるのでまだまだ完治することが難しい病気の１つです。私たちは特にこの治療耐性、薬物が、抗がん剤が効かなくなるといったところに着目した研究を進めています。乳がんの多くは女性ホルモンをエサにしてがんが増えており、それをブロックする薬、ホルモン療法というタモキシフェンという薬があります。これを投与すると非常によく効きまして、乳がんが治っていきます。多くの患者さんが救われてはいるのですが、一部と言いましても40％の患者さんにつきましては、治療の継続中に突然薬が効かなくなって、がんが大きくなってしまいます。これは予測することはできないし、なぜこういったことが起こるのかということもわかっていません。私たちはこの乳がんの治療において、ホルモン療法で早くに治すことができないか、耐性が生じる前に完治させたい、と考え研究を進めました。

そこで１つ注目したのが亜鉛という金属です。これは必須微量元素と言いまして、体の中に微量あることが体を非常に元気にします。無いと、成長障がい、有りすぎても体にとっては良くない、体を健康に維持するには亜鉛が非常に重要な役割を果たしているということがわかってきました。では、がんを治療する時に、この亜鉛を一緒に補給したら何か良いことがあるかな、と考えまして実験をすすめましたところ、こちらに今乳がんの細胞の写真を示しておりますが、これ１つ１つが乳がんの細胞です。タモキシフェンでホルモン療法を処置しますとゆっくり細胞が死に始めます。ところが先ほど言った亜鉛、これを併用処置しておきますと劇的に乳がん細胞を死滅させます。亜鉛のみではそのような効果は出てこないということで、このホルモン療法、抗がん剤と亜鉛を併用することで抗がん活性をより引き出すことができる、ということを私たちは明らかにしました。先ほど、耐性が生じた乳がん、これは非常に困ったことなのですが、これに対しましても亜鉛を併用することで劇的にがんだけをやっつけることができ、動物実験においても良いこと、つまり腫瘍を小さくすることができました。さらに亜鉛を併用したものは寿命も長くしたということで、この抗がん剤投与した時に亜鉛があると非常に良い役割

を果たします。亜鉛は乳がん治療戦略の強力なツールとして期待でき、なぜこういったことが起きるのか、なぜ効くのかというところを中心に、今研究を進めています。一方、がんになるとげっそり痩せるという印象はありませんでしょうか。乳がんに関しましても、進行性の乳がんというのは、乳房にがんができるのですが、乳房以外のところで正常な組織にも何らかの障害が出てきます。これげっそり痩せています。骨格筋が委縮して、筋肉が衰えています。がんが進むとこのような状態にってしまいます。こういう状態になると、抗がん剤が効かないだけではなく、寿命も短くなってしまいます。何とかしなければいけないのですが、なぜ乳がんではないところで骨格筋が衰えてしまうのか、筋肉が衰えてしまうのかというメカニズムについては未だよくわかっていません。

私たちはこのメカニズムを解明して、骨格筋を衰えていくのを抑制できないかと考えまして、まずは動物でがんのモデルをつくりました。こちら左側ががんのねずみ、右側が正常なねずみになっています。左側のねずみはがんを持っているので骨格筋が弱くなっていてすぐにポトンと落ちてしまいます。ねずみはつかまって元気に遊ぶ習性があるのですが、すぐポトンと落ちてしまいます。正常のマウスは金網にひっついています。このように、がんで骨格筋が衰える様子（がん悪液質）をねずみでつくりました。ではこのすぐポトンと落ちてしまうねずみに、抑制できる物質はないかということで、タウリンに着目しました。タウリンはドリンク剤に非常に多く含まれていて、昔は「ファイト一発！」というCMがありました。タウリンは魚介類にも多く含まれています。タウリンを摂取しないねずみはすぐ落ちてしまうのですが、タウリンを飲ませた方はつかまっている時間が長くなるというデータを、私たちは、得ております。そもそもなぜタウリンに着目したかというと、タウリンは体の中にも存在しますが、食べ物からも摂取できます。体の中のタウリンの70％は骨格筋に存在します。骨格筋が衰えていくのであれば、そのタウリンを補給すれば何とかならないかという発想から始まった研究です。タウリンを骨格筋の衰えの抑制に使えそう、タウリンがないと元気がないねずみもタウリンがあれば元気になる、この間に抗がん剤で治療できたらいいなということで、なぜタウリンが効くのか、今研究を進めています。

タウリンという物質、その中にS、硫黄が入っています。硫黄は大変体に良いということが最近わかってきまして、その中でも硫化水素、温泉に行くとクサイ臭いがすることがありますよね。あれが硫化水素です。あのガス、硫化水素は、構造式で書きますと、SとHから成るのですが、有りすぎると毒物になりますが、微量、体の中にある、体の中でもつくることができる、微量あることで健康を維持しているということがわかってきました。ただガスなので、気体なので、コントロールするのが非常に難しい。それと役割についてはまだまだわかっていなくて、骨格筋に対しても、何か良い役割を果たしている、果たしていそうだ、というところまではいろいろな報告があるのですが、では骨格筋に対して、私たちが何とかしたいがん悪液質への骨格筋が衰えるというのを何とかできるか、というところまでは研究がまだまだ進んでいないというのが現状です。

私たちは先ほどのねずみのモデル、そして細胞実験を使いましても、筋肉の元になる細胞を培養していると、筋肉、今赤いファイバーが見えていると思いますが筋肉ができます。じつはこれがん細胞、乳がん細胞を同時にこの筋肉の元になる細胞と存在させますと筋肉ができなくなり、赤いファイバーが減っているのがわかるかと思います。こういった実験モデルをつくりまして、タウリン、あるいは硫化水素が、筋肉になる元の細胞が筋肉になる過程、プロセスをどのように制御しているかということについて、今研究を進めています。硫化水素はガスです。ガスという物は非常に扱いにくい、気体ですので扱いにくいです。体の中でその量をコントロールするのは非常に難しいのですが、私たちはこれまでに硫化水素の発生をコントロールできる薬剤を開発中です。これはミセルというのですが、ミニカプセル、ナノカプセル、非常に小さいカプセルと思ってください。その中に硫化水素の発生の元になる物を入れておいて、これが細胞の中に入ると硫化水素が発生して、筋肉が衰えるのを抑制するような効果を出せないかということで研究を進めております。今、明らかにしたいのはこのカプセルの中に硫化水素を発生させる元を入れて、それを筋肉の元になる

細胞に導入して、がん悪液質で衰えていく筋肉を、硫化水素、ガス、気体を使ってコントロールできたらいいなと考えております。

この研究に関しましては共同研究ということでいろいろな研究者が一緒になってがんばっています。グローバル共同研究支援をいただいておりまして、ペンシルベニア州立大学の材料工学部、工学部の先生、ガス、気体をコントロールするのが非常に得意な材料をつくっている先生で一緒にやっています。大阪公立大学の中瀬、私の夫です。理学という領域の中で、物質について詳しく研究していて、家族の中にも共同研究者がいるととても便利と言いますか、いつでも何でも聞けます。そして薬学部で共同研究している先生、京都大学の先生、薬物の動きをコントロールするのが非常に上手な先生です。いろいろな分野の先生が寄り集まって、知り合いの知り合いはもう知り合いだと私は思っていますので、学会等で知り合いになった先生と、自分たちの強みを寄せ集めて共同研究を進めて、次世代の医薬品を創出しようと頑張っています。本当にいろいろな人たちに支えられていて、研究は１人では成しえません。ある特定の領域にかたまっていても新しい物は生まれてこないので、分野を横断的にいろいろな領域の先生たちが集まって、共同研究を進めて、新しい薬をつくっていこうとしています。このスライドの写真は研究室の学生たちで、明日、薬剤師の国家試験を受けに行く６年生です。その前に卒業研究として、今発表した一部の研究について、一緒に頑張った仲間です。以上です。

外国にルーツを持つ児童・生徒の学習意欲に関する社会福祉学的研究

心理・社会福祉学部社会福祉学科 講師　**野上 恵美**

野上と申します。本日はこのような場で報告の機会をいただきありがとうございます。時間が限られておりますので早速内容に入らせていただきます。

本日は主に４点について報告いたします。上の２点は研究課題に関連する内容について、下の２点に関しましては共同研究という仕組みについて、今回この共同研究をして私が実感したことをお話させていただきます。まず、共同研究のメンバーを紹介いたします。この共同研究は３名全員、本学の社会福祉学科の教員となっておりますが、それぞれ専門性が全く異なっているという特徴を有しております。専門分野は異なりますが、３名がそれぞれ学校で外国にルーツを持つ児童・生徒と会ったり、あるいは調査協力者の家庭で外国にルーツを持つ児童・生徒と会ったり、あるいはNPOなどの現場に出向いて現場感覚を持ち続けることを意識して研究調査を進めております。次に、本共同研究が目指している方向性についてこのスライドで説明させていただきます。まず、この共同研究は専門性の異なるメンバーの間で、外国にルーツを持つ児童・生徒が様々な生活課題を抱えているという前提を共有し、生活課題の１つである学習意欲の向上にアプローチできるような実践、ここでは支援という用語を使っています。そのような支援を共同で作り上げていくということを目指しました。

具体的な支援として、学校現場、そして家庭、NPOなどが実施している母語継承教室や学習支援教室、そういった場所で実践でき、かつそれぞれが相乗効果が期待できるような支援の検討というものを行っております。とりわけ、こちらの黄色の矢印で示しております、学校とNPOとの連携の可能性を、今以上に連携ができないかというようなことを検討し、それが家庭での学びが充実することをねらいとしております。

この研究課題の着想に至った社会的背景について示しておきます。すでに多くの方がご存知だとは思いますが、コロナパンデミックで2020年と2021年は減少傾向に転じましたが、近年、日本における外国人人口は増加傾向にあります。現在は日本の総人口の2.7％が外国人人口となっています。厳密に言いますと、外国籍人口ということになり、この統計には外国にルーツを持つ日本国籍取得者は含まれていないことから、そのような人々を含むともう少し数が増えるということが予想されます。このような状況を踏まえますと日本社会の中で外国人の生活課題が顕在化するということは想像に易いかと思います。しかしながら、こういった顕在化する外国人を取り巻く生活課題というものを、外国人が引き起こす問題、外国人が生み出している問題としてとらえるのではなくて、私たちは日本社会の制度のひずみ、あるいは狭間から生じる社会的課題であるととらえ、それに向き合い、支援策を講じることが研究の出発点となっております。さらに外国人人口の増加に伴い、日本語指導が必要な外国にルーツを持つ児童・生徒が年々増加している状況があります。この状況をふまえまして、文部科学省や文化庁はそのような児童・生徒に対し様々な日本語教育支援を打ち立てています。外国にルーツを持つ児童・生徒、長く日本社会で生活をするということも考えると日本語教育支援が大切であるということは前提として間違いはありませんが、同時に私たちは児童・生徒が持っている言語、いわゆる母語、継承語とよばれるものが育まれる場所をつくることが不可欠であると考えています。

それではなぜそういった日本で生活をする外国にルーツを持つ児童・生徒に母語・継承語教育支援が必要なのかを次のスライドで説明させていただきます。外国にルーツを持つ児童・生徒の学習意欲の向上に、なぜ母語・継承語教育

支援が必要なのかを説明させていただくために、第２言語習得について研究をしているカミンズの理論をここで引用します。カミンズによると言語形成期の間に複言語に接する状況におかれると、どちらの言語も未発達なままになりやすいと考えられています。言語発達は生活言語を土台としてどんどん抽象度の高い学習言語が積み上げられていくと考えられていることから、家庭内で母語が使われ、学校では日本語が使われる状況が続いてしまうと、どちらの言語も身につけられない、不充分なままになってしまうことになります。このような言語状態をセミリンガル状態といい、学習意欲の低下だけでなく、アイデンティティクライシスを引き起こすことになり、不登校や非行行為、そしてメンタル不調の一因となることが考えられています。

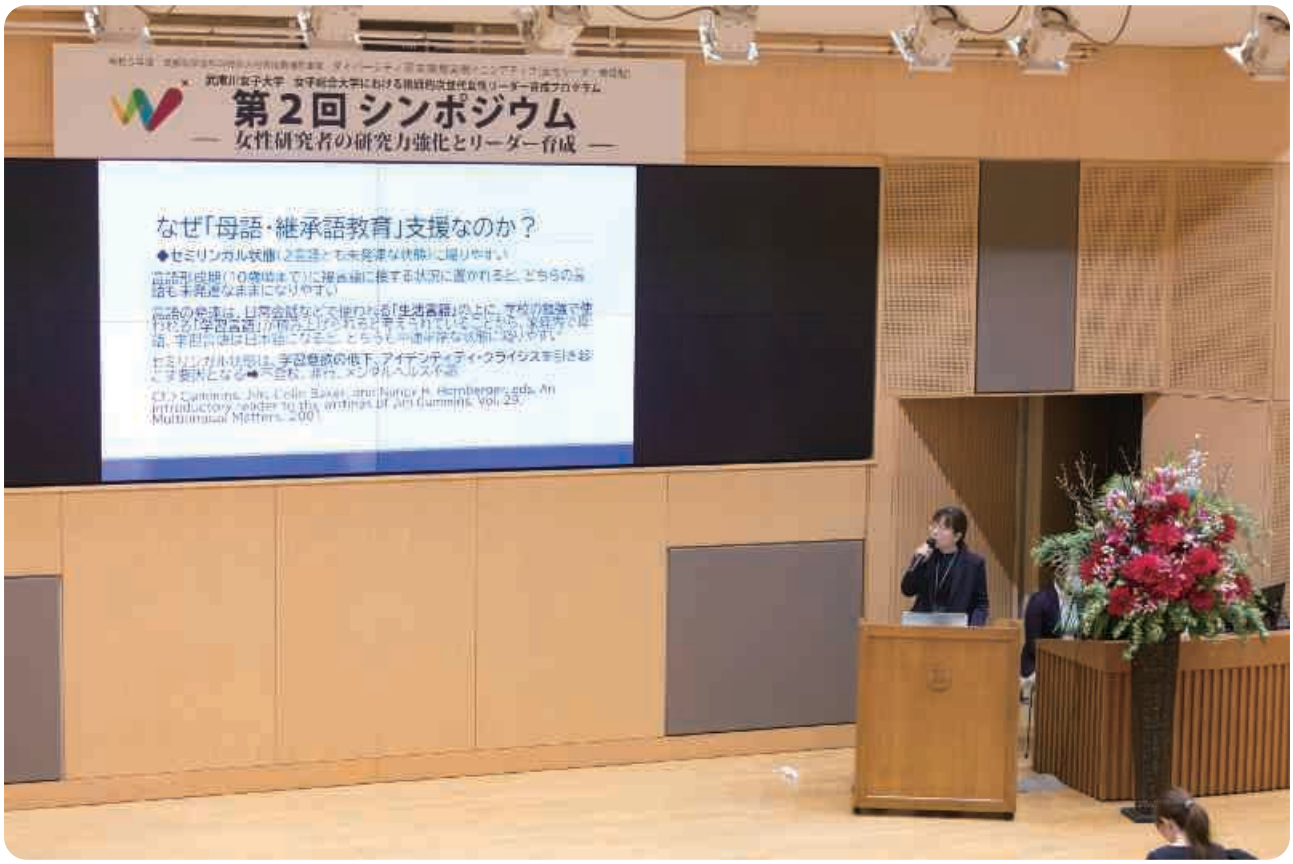
ここで、これまで私がフィールドで出会ってきた、私が専門としています、ベトナムにルーツを持つ子どもについて少し紹介させていただきます。親の仕事の都合で小学校の早い時期、低学年に日本にやってきたベトナム人の子どもというのは、そのまますぐに日本の公立学校に入る場合が多いです。最初は中々日本語ができずに苦労しているのですが、やはり１年もすると流暢に日本語を話し始めて学校生活にもほぼなじんでいくことから生活上何の不自由もないように見えます。しかしながら、学年が進み勉強の内容が高度になっていくにつれて、教科書に書かれている言葉の意味がつかみ取れなくなってくる、ということが徐々に顕著になってきます。例えば、「直角」や「正方形」といった、学校でも家庭でも日本語で生活をしてきた私たちにとっては、そういった教科書の言葉も日常の生活の中で身につけてられるので、学校でその言葉を教科書で見ても、たいてい字を見たら意味が解るとなりますが、ベトナムにルーツを持つ子どもたちは学校で初めてその言葉を見ることになり、そういった言葉を家庭で身につける機会がないことから、周りの生徒よりも理解に時間がかかってしまうというような現状があります。

そこで私たちは、家庭、学校、NPOが実施する母語・継承語教室といった場所が、外国にルーツを持つ児童・生徒に大きな影響を与えている３つの場としてとらえ、そしてそれらの３つの場所を足がかりに外国にルーツを持つ児童・生徒が感じている生きづらさの背景にあるものを明らかにし、生きづらさの解消が期待できるような母語・継承語を育みながら学習意欲の向上へとつながる支援を検討することにしました。外国にルーツを持つ児童・生徒のおかれている複言語状況を日本語教育に偏重した支援だけで埋めてしまうのではなくて、こういった複言語状況がその児童・生徒にとって強みとなるような支援を構築することを目指しています。今後、この共同研究で明らかになった点については共同研究者と整理をしていきつつ、具体的な支援について現在検討をしているという途中になります。

ここで共同研究の意義というものを女性研究リーダーの育成という観点から述べさせていただきます。共同研究で試みた課題は近年社会福祉の領域で関心が高まりつつある多文化ソーシャルワーク、その分野にインパクトを与えることができる研究ではないかと考えております。また、現在、社会福祉学科で多文化ソーシャルワークという領域を体系的に学ぶことができる大学は、全国的に見てもほとんどないということから、この共同研究の成果を広く様々な場所で公表していき、本学科、社会福祉学科が多文化ソーシャルワークをしっかりと学べる大学であることをアピールしていきたいと考えています。そうすることによって将来的に多文化ソーシャルワークの分野を発展させていくような女性研究リーダーの卵、高校生になりますが、そういった人たちを引き付けることもできるのではないかと長期的な視野も持って考えております。この画像は共同研究者の１人である吉富志津代が多文化ソーシャルワークの視点を持って取り組んできた活動の紹介になります。ここから共同研究の仕組みについて私が実感したことをお話させていただきます。共同研究を行う上で工夫した点についてスライドに簡潔に３つ上げさせていただきました。３つ目の同じ所属先のメンバーで始めることについて、普段頻繁に顔を合わせながらも様々な業務で中々自分たちの研究について話したりする機会がなかったことから、ぜひ同じ職場の仲間と共同研究をしたいと思い、今回このプロジェクトに申請させていただきました。共同研究をとおして多くの知見を得ることができました。そしてさらに新たな気付きとして、

同じ場所で研究をするということで本学科が多文化ソーシャルワーク研究・教育の拠点となる可能性を見いだすことができました。この画像は２年生のソーシャルワーク実習で学生が多文化ソーシャルワークについて学んでいる様子になります。本学科では本年度初めてソーシャルワーク実習で外国人住民の理解を目的にした多文化共生に関するプログラムを実施いたしました。

最後に私が分野横断的な共同研究に挑戦して実感したことをお話させていただきます。私自身、これまで社会福祉学に決して近いところにいたわけではなかったのですが、この共同研究を行うことにより社会福祉学と私の専門である文化人類学が他者に寄り添う学問であるという共通点を見いだすことができました。こういった気付きをきっかけに、これからもいかなる人々も安心して暮らせる社会づくりへとつながる研究を分野横断的に取り組んでいくと同時に、そういった研究が広がっていくようなネットワークづくりに力を入れていきたいと感じております。これで私の報告は以上となります。ありがとうございました。



多分野介入による認知症予防教室における音楽活動の有効性

音楽学部応用音楽学科 教授　一ノ瀬 智子

応用音楽学科の一ノ瀬より「多分野介入による認知症予防教室における音楽活動の有効性」というテーマで報告させていただきます。

先進諸国では高齢化が進行しており、認知症になる方の数も増えつつあります。そのような中、認知症の進行予防の重要性が認知症施策推進大綱によっても提唱されています。また認知症は生活習慣病や運動不足がそのリスクを高めること、社会的孤立、うつ病などもリスクと関連していることから身体面、精神面また社会面からのアプローチも必要と考えられます。

そのような中、武庫川女子大学健康科学研究所の認知症予防チームによる認知症予防教室が2021年10月からスタートしました。多面的な介入によって認知症改善効果が知られるフィンランドのFINGER研究を参考にして、学内の健康・スポーツ科学、栄養学、看護学、心理学、そして音楽の専門家が集まってプログラムを運用しています。特に運動指導と軽運動、認知トレーニングが中心になって、４領域との組み合わせでプログラムが構成されており、認知機能の長期的な改善や有用な認知症予防法の開発を目指して取り組み、その効果を定期的に測定しています。身体計測、体力づくり評価、認知機能評価などを行っていますが、現時点では、運動能力の上昇や認知機能の維持の効果が、認知症予防教室全体の成果として確認されています。

次に音楽活動についてご報告いたします。対象者は教室参加者の１期生18名と２期生21名、平均年齢はおおよそ70歳半ばです。認知症予防教室そのものは運動を毎週実施していますが、音楽活動はおおよそ月１回の頻度で60分程度です。音楽のプログラムは応用音楽学科の教員２名、助手３名（認定音楽療法士）が企画し、学生が個別のサポートとして参加者に関わっています。

認知症予防の音楽活動の有効性を示す論文をいくつか紹介させていただきます。双生児研究において音楽活動が認知症の発症率に関連しているという研究が報告されています。楽器演奏については、楽器演奏を頻繁に行う人が認知症発症のリスクが、ダンスやボードゲームに続いて低いという結果、打楽器活動で軽度認知障害の高齢者の認知機能スコアが改善されたという報告もされています。また合唱によってオキシトシンが増加し、ポジティブな感情や社会的つながりを示すような行動が誘発されたという結果も示されています。音楽と身体運動の二重課題については、音楽有り運動の方が音楽無しの運動よりも認知機能向上に効果ありという報告や、音楽を用いた二重課題による介護予防効果に関する報告もされています。

これらの知見をふまえて、私たちの音楽プログラムでは、打楽器活動、歌唱、身体運動と歌唱による二重課題を中心に行ってきました。二重課題は２つの異なる課題を行うことで認知症予防に効果があると言われています。この結果として、音楽プログラム実施により精神的な活性化が促進されたという結果が得られました。

次にこの内容を具体的にご紹介いたします。まず二重課題ですが皆さん、『たきび』という歌をご存知でしょうか。この歌を歌いながらグー、チョキ、パーと左手で、右手はチョキ、パー、グー、これを同時に行いつつ歌を歌っていくという課題です。なかなか集中力や注意力を要する課題かと思います。あと、打楽器演奏については２つのグループに分けて異なるリズムを交互に演奏してもらいました。相手の音を聞きながら、注意を払いながらリズムに合わせて演奏するというものです。

このような音楽活動を行った上で、「日本語版UWST気分チェックリスト」を初回と最終回の音楽活動前後で行い、その時の参加者の皆様の気分を４段階で表していただきました。緊張覚醒と

エネルギー覚醒という２つの評価軸があり、緊張覚醒の点数が高いと緊張と不安、ネガティブな緊張を指し、エネルギー覚醒はポジティブな活性化、活動的な状態を表します。またエネルギー覚醒は知的活動と関わりがあると言われています。この結果、音楽活動後にはネガティブな緊張覚醒が低下し、ポジティブなエネルギー覚醒が上昇したという結果が得られ、音楽活動の中で精神的な活性化が促進されたことが示されました。

また毎回の活動後にアンケートを記入していただいています。「頭の体操になる」、「家でもやってみたい」「より出来たように思う」など意欲や達成感を示すコメントが得られました。楽器活動や合唱活動に対しては「面白い」「和みます」「楽しくできました」「スッキリした気分になりました」「心が晴れやか」「活力につながる」などのコメントからリラックスした中で活性化された様子が示されています。これらのことからも気分チェックリストの結果と併せて精神的な活性化が促進されたと考えます。

このような活動を経て、新たに鍵盤ハーモニカ、呼吸を伴う楽器演奏を導入しました。介入スケジュールとしては、音楽無しの期間の後、１月から音楽を再開して、計10回で行う予定です。鍵盤ハーモニカは実施回数が少ないので配付して持ち帰っていただき、自宅での練習を推奨しています。また肺活量、最長発声持続時間など呼吸や口腔機能に関わる項目の測定や、新たな認知機能検査も追加しました。鍵盤ハーモニカ導入の理由としては、最近の研究により鍵盤ハーモニカを用いた訓練で高齢者の方の言語記憶と神経処理効率が向上したという結果が示されています。また息を吹いて指で鍵盤を押さえたり、複数の活動を行うマルチタスク的な要素があることから脳のトレーニングになると考えられること、また唄口をくわえて呼吸をしたりタンギングのために舌を動かすことが口腔体操になり、嚥下機能の維持向上、オーラルフレイルの予防、フレイルの予防につながり、認知症発症のリスク低減にも貢献できるのではないかと願いつつ進めています。

今後の課題としては、認知症予防教室の先生方と協力させていただきながら、様々な指標と音楽活動における指標との関連性を検討すること、また現在進行中の研究における指標についてもさらに検討していきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

閉会挨拶

武庫川女子大学副学長／女性研究リーダー
育成推進センター副センター長
高橋　享子

皆様、年度末で大変お忙しい時に本プログラムの第２回シンポジウムにご参加いただきまして本当にありがとうございました。今週はこの冬一番の寒気団が到来しておりまして、交通機能なども大変心配いたしましたが、無事に東京から慶応義塾大学の満倉先生をお招きすることができまして大変うれしく思っております。満倉先生にはリアルタイムの感情がこのようにして測れる、という、本当に目から鱗が取れると言いますか、良い話を聞かせていただきました。この分野が益々社会に求められているのだなということを痛感いたしました。満倉先生は、国際的に活躍されておられまして、日々忙しい中で、実は本日、ご予定が空いていらっしゃったというのが奇跡的でありまして、基調講演をお引き受けいただきましたことは大変有難く思っております。本日お越しいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

また本日、この寒い中、東京からJSTのプログラム主管でいらっしゃいます山村康子様と、主任の成田恵理子様においでいただきまして誠にありがとうございます。日頃は大変お世話になりまして厚く御礼申し上げます。

本日は、学内の若い３名の女性研究者共同研究の中間発表をしていただいたわけですが、このシンポジウムで発表されたことが先生方の研究の次へのステップに繋がり、成果が上がっていき、実りある研究に発展するというふうに思っています。どうぞ期待しておりますので今後ともよろしくお願いいたします。

改めましてご登壇いただきました皆様、ご参加いただきました皆様に心より厚く御礼申し上げます。この事業は継続して進めてまいります。この事業を通して１人でも多くの女性研究者を誕生させ、そして研究リーダーとして育成し、世界に羽ばたき活躍していただくように、誠心誠意、我々は努力してまいりたいと思っておりますので、今後ともご指導ご支援賜りますようにお願い申し上げます。

外は大変寒いのですが、私の心は今、「研究マインド」で大変熱くなっております。明日からでも皆さんに共同研究をもっと進めていこうと働きかけ、JSTからいただいております補助金をフルに使わせていただきまして、より多くの研究者がこの大学から誕生していくように努力していきたいと思っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

簡単ではございますが、閉会の挨拶にかえさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

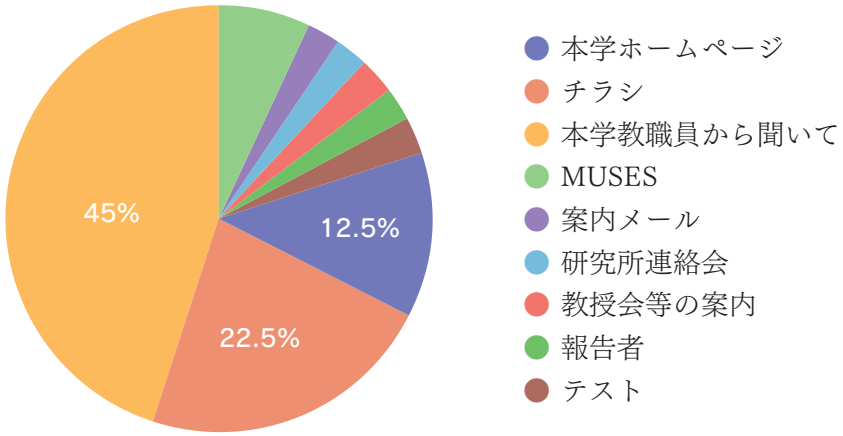
会　場　風　景

第2回シンポジウム

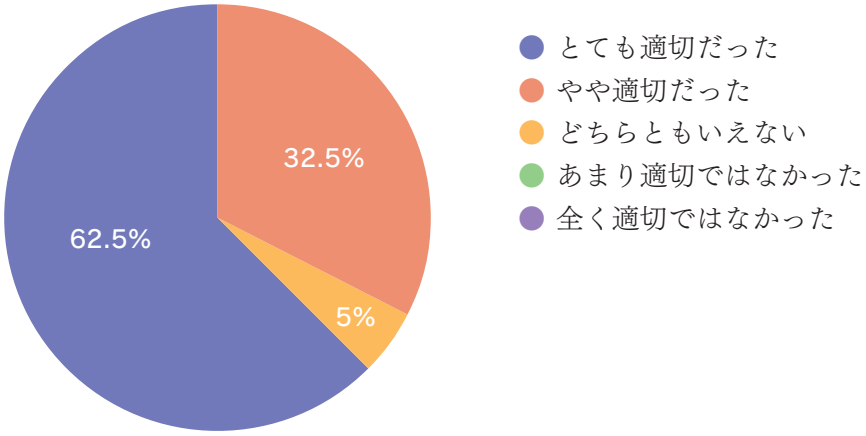
令和5年度　文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（女性リーダー育成型）
武庫川女子大学　第2回シンポジウム
女子総合大学における挑戦的
次世代女性リーダー育成プログラム
―女性研究者の研究力強化とリーダー育成―
日時　令和7年2月21日(金) 13時30分～15時30分
場所　日下記念マルチメディア館メディアホール
主催　武庫川女子大学　女性研究リーダー育成推進センター

アンケート結果報告

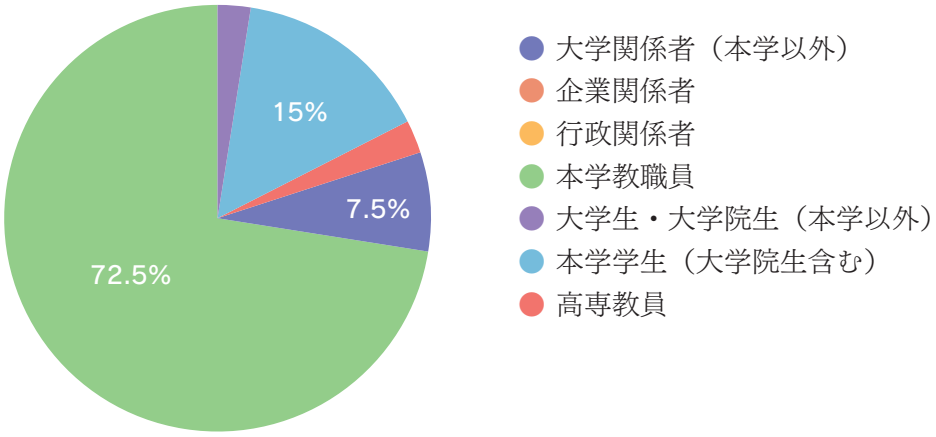
Q. 1. 本シンポジウムを知ったきっかけを教えてください。



Q. 2. 本シンポジウムの時間の長さは適切でしたか。



Q. 3. ご所属についてお尋ねします。該当するものを選択してください。



Q. 4. 本シンポジウム全体へのご意見･ご感想、今後聞きたい講演内容等があればお聞かせください。

普段、なかなか聞く機会がもてない先生方の研究内容を詳しく聞くことが出来、大変貴重なシンポジウムでした。短い時間で分かりやすく説明して頂きました。どの先生も素晴らしく、また研究発表される日を心待ちにしております。
女性研究者として活躍されている方々のお話が聞ける非常に貴重な機会でした。また、自身の分野以外の研究、そして共同研究の方法などを知ることができ、勉強になしました。
とても興味深い講演でした。「多方面にアンテナを張る」ということは柔軟な考えをつくる土台となることなので、機会があれば参加したいと思います。またなるべくたくさんの教職員の方に今回のような講演会に参加してもらえたらよいなと思いました。
満倉先生のバイタリティ、熱量、そして物事の考え方に触れることができ、自分も研究をしていこう！という思いになりました。このような熱量がありユーモアにあふれる女性研究者の先生との接点が定期的にあると、自身の熱量を追加することができありがたく思います。素敵な講師の先生をセッティングいただきありがとうございました。
満倉先生のお話は、人文社会学系の自分にとって普段触れることがないテーマだったので、大変勉強になりました。また、同じ大学の先生方の研究についてお話を伺うことができて、刺激を受けることができました。ありがとうございました。
脳波の基調講演は、画期的で大変勉強になりました。女性大学教員におけるリーダーシップに対する考え方についての座談会を開催していただきたいです。
大変刺激的なシンポジウムでした。満倉先生のご講演は医学や工学、グローバルすぎてついていけない部分もありましたが、特にホルモンの移り変わりが見える装置の開発（フェムテック）は現代女性にとって最重要課題だと思われます。「女性は一生女性ホルモンに左右される !!」のお言葉には大きく頷きました。

※回答は一部抜粋しております。

Q. 5.「女性研究者の研究力強化とリーダー育成」にはどのような取り組みが必要だと思われますか。

男性研究者の理解や、男女共同研究の促進が必要だと思います。
今日の講演を聞いて、共同研究、連携の重要性をより感じました。女性はライフステージによって、研究を続けることに困難な場面があると思いますが、本学のように共同研究への支援があることで、継続し、実績をあげ、リーダーになっていくことが出来ると思いました。
女性個人に変われ変われと言うことに限界を感じています。今、女性の研究力強化、リーダー育成が必要になった原因は女性の生物学的な特徴だけにあるのか、それとも構造的差別や社会制度にも問題があったのか。男性の存在が全く登場しないことに大きな違和感を感じました。
基本的なこととして、研究倫理教育が必要だと感じます。研究者としての心構え、研究インテグリティの確保など、一流の研究者に必要なことを身につけていただく必要があると思います。そのうえで、研究者個人のモチベーションアップと、周囲（職場）の理解、精神的なものが必要であると感じます。研究者に対しては、研究できる環境であることに感謝してほしい。サポート体制があってこそ、大学で研究ができることを理解いただきたいです。
大学全体で教職員一体となったリーダー育成を行うという雰囲気の醸成や、研究を楽しみたい！リーダーになりたい！と思わせる強い女性リーダー像を身近に感じられる環境を作ることが必要だと思います。
今回のようにさまざまな分野で最先端を走る方と、ロールモデルにしやすい方、すなわち遠くて大きな目標と手が届きそうな目標を分けた内容であればリーダーにとって共感しやすいのではないでしょうか。また、女性研究者が女性のライフイベントとどのように向き合い、乗り越えてきたのかについての具体的な事例を聞く場があればいいと思います。
ケア労働（育児、介護、家事）に関する取り組みや、男性の参加について話す場が必要だと思います。
今回の満倉先生のような、レベルの高い研究者の講演を身近に聴けることは、研究者としての刺激を貰えるという点で有効な取り組みであると感じます。
忌憚のない意見を言い合える「場」の提供が必要だと感じます。
これまで様々なイベント（シンポジウム、サイエンス・コモンズなど）を実施されていることを、自分が助成を受けるまであまり知りませんでした。今後は自分が積極的にイベントに参加するだけでなく、誰かを誘ってより多くの先生方に知ってもらうようにしたいです。
研究職は海外の機関で働いて「箔をつけてから」というイメージがあります。長期戦になりますし、既に行っている部分ではあると思いますが、高校生のうちから研究職を身近に感じ、職業に関する事だけでなくライフステージについても聴ければ、研究職を目指す生徒・学生が増え研究力強化に繋がると思います。

※回答は一部抜粋しております。

参加人数	**139 名**
アンケート回答人数	**40 名**

令和５年度 文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（女性リーダー育成型）

武庫川女子大学 女子総合大学における挑戦的次世代女性リーダー育成プログラム 第2回シンポジウム

テーマ

女性研究者の研究力強化とリーダー育成

本学では、分野横断型の共同研究や
国際共同研究を推進し、女性研究者の研究力強化と
リーダー育成に取り組んでいます。
本シンポジウムでは、優れた共同研究の事例を通じて、
次世代リーダー育成に関する知見を提供します。

2025 2.21 金
13:30▸15:30

場所 武庫川女子大学 中央キャンパス
日下記念マルチメディア館
メディアホール

対象者 本学関係者・一般

スケジュール

司会 田中 真由美（女性研究リーダー育成推進センター ワーキングリーダー）

13:30 開会挨拶
学長／女性研究リーダー育成推進センター長 瀬口 和義

13:35 基調講演
座長 長谷川 裕紀（女性研究リーダー育成推進センター ワーキングサブリーダー）

世界初！超簡単な脳波計測による感情のリアルタイム計測装置の開発と近未来テクノロジー
慶應義塾大学理工学部教授／医学部精神神経科学教室兼担教授 満倉 靖恵 氏

14:35 令和6年度 活動報告
女性研究リーダー育成推進センター副センター長 高橋 享子

14:45 令和6年度 武庫川女子大学 架橋横断的重点共同研究・グローバル共同研究 報告

難治性乳がん悪性化の機序解明と新治療戦略の創出
薬学部健康生命薬科学科 教授 中瀬 朋夏

外国にルーツを持つ児童・生徒の学習意欲に関する社会福祉学的研究
心理・社会福祉学部社会福祉学科 講師 野上 恵美

多分野介入による認知症予防教室における音楽活動の有効性
音楽学部応用音楽学科 教授 一ノ瀬 智子

15:25 閉会挨拶 副学長／副センター長 高橋 享子

シンポジウムについての
感想・ご意見をお聞かせください。
https://qr.paps.jp/alc7a

基調講演

世界初！超簡単な脳波計測による感情のリアルタイム計測装置の開発と近未来テクノロジー

慶應義塾大学理工学部教授／医学部精神神経科学教室兼担教授
満倉 靖恵 氏

経歴

学位：博士（工学）博士（医学）
現職：慶應義塾大学理工学部教授 / 医学部精神神経科学教室兼担教授
株式会社イーライフ取締役CTO、8illion　株式会社取締役CTO、電通サイエンスジャム取締役CTO、FeMup株式会社代表取締役社長、IKI Inc., 米国代表取締役社長 / IKI JAPAN代表取締役社長 / TBS 7days newsコメンテータ など
生体信号解析、リアルタイムノイズ除去、脳神経科学、精神疾患の研究に従事
IEEE、日本高次脳機能障害学会、日本神経心理学会、電気学会などの正会員
著書：「フキハラの正体　なぜ、あの人の不機嫌に振り回されるのか？」（ディスカヴァー・トゥエンティワン）など

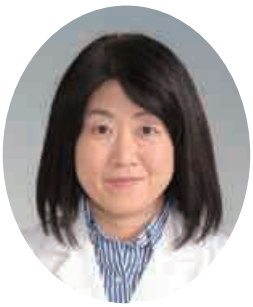
要旨

本講演では、私が取り組む多岐にわたる研究を通じて、女性研究リーダーとしての可能性と挑戦について共有します。

開発した“感性アナライザ”は、リアルタイムで感情を可視化する世界初の装置であり、完成までに17年もの歳月を要し2013年に完成しました。これと同時にスタートアップを立ち上げ、感性の科学的理解に革新をもたらしました。現在ではカリフォルニアにも拠点を持つスタートアップを始め、9つのスタートアップを立ち上げました。私の特許技術は、心理学や行動科学、さらには産業分野へと発展を遂げています。また、人を対象とした研究においては、脳波やホルモンなどの生理データを多角的に解析し、生活の質を向上させるための新たな知見を提供しています。これらの研究は、異分野の知識を統合し、実社会に役立つ技術革新を目指す私の信念に基づいています。

本講演では、これらの研究成果を紹介するとともに、研究者としてのキャリア形成やリーダーシップの重要性について議論し、次世代の女性研究者の活躍を後押しするきっかけを提供できればと考えています。

■ 武庫川女子大学 架橋横断的重点共同研究・グローバル共同研究 報告



薬学部健康生命薬科学科
教授 **中瀬 朋夏**

〈グローバル共同研究〉

難治性乳がん悪性化の機序解明と新治療戦略の創出

要 旨

現在、日本において、20～39歳（AYA世代後期）のがん患者の約80%は女性であり、そのがん種は乳がんが最も多いです。乳がんに対しては、多くの治療薬の誕生により、がんの中でも、抗がん治療をリードしています。しかし、乳がんは、忘れた頃に、転移や再発を引き起こし、効いていた抗がん剤が、突如、効かなくなることがあり、まだまだ治療が難しい病気です。乳がんのさらなる治療成績の向上と根治のため、未だ大部分が不明な乳がんの悪性化機構の解明とそれに基づく新治療戦略の創出は強く求められています。我々は、乳がん細胞を用いて、悪性化プロセスを再現するモデルを開発し、別の治療に用いられている医薬品や身近にある栄養素が乳がんの治療に役立つことを明らかにしてきました。これまでにない新視点から乳がんの謎に迫り、分かってきた乳がん治療のヒントについて報告します。

心理・社会福祉学部
社会福祉学科
講師 **野上 恵美**

〈架橋横断的重点共同研究〉

外国にルーツを持つ児童・生徒の学習意欲に関する社会福祉学的研究

要 旨

私たちは、日本で生活する外国にルーツを持つ児童・生徒の学習意欲を高める要因について、社会福祉学的視点に基づき研究を行っています。今回の報告では、学校環境、言語環境、支援環境という三つの環境における事例を踏まえ、複雑な環境の中で学習に取り組むことを求められる外国にルーツを持つ児童・生徒は、直接的な支援が求められると同時に、児童・生徒に関わる大人（保護者、教師、支援者）への間接的な支援も重要になってくることを示します。そのうえで、「学校現場で求められる支援」と「家庭内で求められる支援」について具体的な実践方法を提示します。さらに、学校でも家庭でもないNPOが「第三の居場所」として学校と家庭の結節点となり得るかどうかについて検討します。

音楽学部応用音楽学科
教授 **一ノ瀬 智子**

〈架橋横断的重点共同研究〉

多分野介入による認知症予防教室における音楽活動の有効性

要 旨

武庫川女子大学健康科学総合研究所（旧栄養科学研究所）における認知症予防教室は、認知機能の改善と有用な予防法の開発を目的として2021年より実施されています。

当教室では、健康・スポーツ学、心理学、食物栄養学、看護学、音楽の5つの専門分野が連携して包括的なアプローチを通じた認知症予防の実践と研究を行っており、運動と栄養の分野では運動能力の向上や身体組成の改善、回想法や音楽を活用した介入では精神的賦活に寄与する有効性が明らかになっています。

本発表では取り組みの一環として行われている音楽活動に焦点を当て、歌唱、楽器演奏を中心としたプログラムによる具体的な介入方法と現時点で得られている成果、ならびに評価における課題について報告します。

■ 2023年度、2024年度の活動報告

NEWS LETTER
vol.1・2はこちら

2023/ 12/1	令和5年度教育支援員配置
12/14	ダイバーシティ（女性リーダー育成型）事業説明会－女性研究者交流会－開催
2024/ 2/16	キックオフシンポジウム開催（第1回シンポジウム）
3/4	女性研究者のためのリーダー育成研修「アサーティブコミュニケーション」開催
3/8	女性研究者のためのリーダー育成研修「ハラスメント対策」開催
3/11	女性研究者のためのリーダー育成研修「リーダーシップ」開催
3/15	女性研究者のためのリーダー育成研修「異文化理解」開催
4/1	令和6年度教育支援員配置
4/1	カウンセラー配置（キャリア・カウンセリング開始）
4/22	令和6年度女性研究リーダー研修　採択者決定
5/29	サイエンス・コモンズ「オープニング内覧会」開催
6/1	2024年度 KAKEN塾【若手研究・基盤研究（C）以上対象】開催 計5回（6/1、6/15、6/29、7/13、7/27）
6/8	2024年度 KAKEN塾【基盤研究（B）以上対象】開催　計3回（6/8、7/6、8/3）
6/19	第1回サイエンス・コモンズ セミナー開催
6/24	令和6年度架橋横断的重点共同研究・グローバル共同研究支援　採択者決定
6/21	令和6年度ラビークラブ見学会開催
6/28	第1回MUKOJO研究ポットラック開催
7/5	第1回ランチタイムミーティング開催
7/12	令和6年度武庫川女子大学大学院フェローシップ制度　採択者決定
7/24	第2回サイエンス・コモンズ セミナー開催
7/25	第2回MUKOJO研究ポットラック開催
8/2	令和6年度架橋横断的重点共同研究・グローバル共同研究支援（追加募集）採択者決定
8/21	第3回MUKOJO研究ポットラック開催
9/9	大学院生交流会～大学院のリアル・研究の楽しさを発見しよう！～開催
9/21	ゴンザガ大学による女性リーダーシップ研修開催 完全オンライン 計7回（9/21、10/5、10/19、11/9、11/16、12/7、12/14）
9/21	2024年度 研究倫理塾　計3回（9/21、10/5、10/19）開催
9/25	第3回サイエンス・コモンズ セミナー開催
10/17	令和7年度女性研究リーダー研修　採択者決定
10/19	女性研究リーダー育成のための英語スキルアップ研修プログラム開催 計5回（10/19、11/2、11/30、12/7、12/14）
10/23	プレコンセプションケア セミナー開催
10/29	第4回MUKOJO研究ポットラック開催
10/30	第4回サイエンス・コモンズ セミナー開催
11/27	第5回サイエンス・コモンズ セミナー開催
12/18	女性研究者交流会開催
12/19	第5回MUKOJO研究ポットラック開催
2025/ 1/27	第6回MUKOJOポットラック開催
1/29	第6回サイエンス・コモンズ セミナー開催
2/21	第2回シンポジウム開催
2/26	第7回サイエンス・コモンズ セミナー開催予定
3/1	第2回大学院生交流会開催予定

主催・問合せ
武庫川女子大学
女性研究リーダー育成推進センター
〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-46
E-mail cewl@mukogawa-u.ac.jp
TEL 0798-45-3506

武庫川女子大学
女性研究リーダー育成推進センター
https://www.mukogawa-u.ac.jp/~cewl/

武庫川女子大学
サイエンス・コモンズ
https://scommons.mukogawa-u.ac.jp/

シンポジウムチラシ

令和５年度 文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（女性リーダー育成型）

武庫川女子大学
女子総合大学における挑戦的
次世代女性リーダー育成プログラム
第2回シンポジウム

2025 2.21（金）
13:30 ▶ 15:30　事前申込み要

会場　武庫川女子大学 中央キャンパス
日下記念マルチメディア館
メディアホール

対象者　本学関係者・一般

テーマ　## 女性研究者の研究力強化とリーダー育成

本学では、分野横断型の共同研究や国際共同研究を推進し、
女性研究者の研究力強化とリーダー育成に取り組んでいます。
本シンポジウムでは、優れた共同研究の事例を通じて、
次世代リーダー育成に関する知見を提供します。

基調講演

世界初！
超簡単な脳波計測による
感情のリアルタイム
計測装置の開発と
近未来テクノロジー

慶應義塾大学理工学部教授／
医学部精神神経科学教室兼担教授

満倉 靖恵 氏

スケジュール Schedule

13:30　開会挨拶
学長／女性研究リーダー育成推進センター長 **瀬口 和義**

13:35　基調講演

14:35　令和6年度 活動報告
副センター長 **高橋 享子**

14:45　令和6年度
武庫川女子大学 架橋横断的重点共同研究・
グローバル共同研究 報告

難治性乳がん悪性化の機序解明と
新治療戦略の創出
薬学部健康生命薬科学科 教授
中瀬 朋夏

外国にルーツを持つ児童・生徒の
学習意欲に関する社会福祉学的研究
心理・社会福祉学部社会福祉学科 講師
野上 恵美

多分野介入による
認知症予防教室における
音楽活動の有効性
音楽学部応用音楽学科 教授
一ノ瀬 智子

15:25　閉会挨拶　副学長／副センター長 **高橋 享子**

申込み　Googleフォームより
https://forms.gle/BhrYPjVhcp5Ltqj46
※Googleフォームからお申込みできない方は
メールまたはお電話にて受け付けます。
〈締切〉2025年2月18日（火）

託児サービス　〈無 料（定員5名）〉
シンポジウム参加者のお子様（満1歳～12歳（小学6年生））が対象です。
利用を希望される方は、男女共同参画推進課（gsankaku@mukogawa-u.ac.jp）へ
ご連絡ください。詳細をお知らせいたします。〈締切〉2025年1月31日（金）

主催・問合せ　武庫川女子大学 女性研究リーダー育成推進センター
〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-46
E-mail cewl@mukogawa-u.ac.jp　TEL 0798-45-3506

阪神電車「鳴尾・武庫川女子大前駅」から徒歩約7分

令和７年３月21日　発行

編集・発行　武庫川女子大学
女性研究リーダー育成推進センター
〒663-8558 西宮市池開町６番46号
TEL：0798-45-3506
FAX：0798-45-3686
cewl@mukogawa-u.ac.jp
https://www.mukogawa-u.ac.jp/~cewl/

印　刷　所　大和出版印刷株式会社
神戸市東灘区向洋町東２－７－２

武庫川女子大学
Mukogawa Women's University